日田の中世墓

――近年の発掘調査から――

吉田博嗣

一　はじめに

日田市は大分県西部に位置し、北部九州のほぼ中央にあたる。盆地内には筑後川を中心とした多くの河川が流れ古来より水の恩恵を多く受けてきた地域である。中世期では在地領主による「別符」開発が進められ安定した耕地を基盤として支配域を広げていったものと思われる。これらの実相を物語る数々の調査成果が上がっているほか、被葬者が領主層と考えられる中世墓の発見も注目すべきものがある。市内における発掘調査は、現在でも増加傾向にあり近年調査の行われたなかから当該時期の資料を紹介していくことにする。

二　近年発見の中世墓

市内では表1に示すように10遺跡26基の中世墓が検出されている。なかでも、日田の代表的な中世墓として知られている朝日宮ノ原遺跡[1]や小迫辻原遺跡[2]、また小迫墳墓群[3]（古墳時代横穴墓の2次使用）などの例は台地上に立地しているのがひとつの特徴である。しかしながら、最近の調査では沖積地や微高地での中世墓の発見が相次いでいる。上記の3遺跡については以前報告しているためここでは省略し[4]、その後の調査成果について述べたい。

表１　日田市の中世墓一覧

	遺跡名	分類	位置	規模(cm)	方位	副葬品	備考	時期
1	朝日宮ノ原遺跡							
	A区　1号墓	土坑墓	屋敷内	200×55×10	南北			
	2号墓	土坑墓	屋敷内	190×70×20	南北	刀子　釘		
	3号墓	土坑墓	屋敷内	160×65×20	南北	小皿　釘		
	4号墓	土坑墓	屋敷内	260×150×30	南北	小皿　青磁碗　釘　和鋏　湖州鏡　篦　念珠一連　紅皿	床面木炭敷き	12末～13世紀中頃
	5号墓	土坑墓	屋敷内	160×70×10	南北	釘(２)		
2	尾漕遺跡１次							
	A地区１号墓	土坑墓	集落内	100＋α×85×15	東西	同安窯系青磁・白磁碗・短刀		14世紀後半
	2号墓	土坑墓	集落内	126×79×18	南北			15～16世紀
	3号墓	土坑墓	集落内	184×82×27	南北			
3	尾漕遺跡４次							
	１号中世墓	土坑墓		123×92	南北	瓦質土器	人骨	15～16世紀
	２号中世墓	土坑墓		120×90	南北		人骨・木棺材	15～16世紀
4	小迫辻原遺跡							
	A区	土坑墓		100×50		土師器皿・土師器小皿・青磁器破片・短刀		
	N区　１号墓	土坑墓	屋敷内	100×50		小皿(２)短刀		
	2号墓	土坑墓	屋敷内			土師皿　土師小皿　釘	河原石(50以上)	
	3号墓	土坑墓	屋敷内			土師皿　釘　短刀		
	4号墓	土坑墓	屋敷内			土師皿　釘		
	K区　方形周溝状遺構１号墓			645×630			墨書青磁碗	13世紀後半
		土坑墓		140×70×15	南北	龍泉窯系青磁碗		13世紀後半
5	小迫墳墓群							
	A－4　2号墓					龍泉窯系青磁碗(2)		13世紀後半
6	慈眼山瀬戸口遺跡							
	4基							
7	手崎遺跡							
	C地区　１号墓	土坑墓	集落内		東西			
	D地区　２号墓	土坑墓	集落内		東西	龍泉窯系青磁碗	人骨	13世紀代
8	寺内遺跡							
	１号墓	土坑墓		130×80×10	南北	龍泉窯系青磁碗		13世紀代
9	徳瀬遺跡							
	１号墓	土坑墓		160×75×20	南北	龍泉窯系青磁碗		13世紀後半
10	森ノ元遺跡							
	２号中世墓	土坑墓		94×80×14	東西	龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁皿・短刀		12世紀後半～13世紀

『尾漕遺跡群』(大分県　1998)所収の中世墓一覧より一部加筆・修正したものである。

〝尾漕遺跡〟（一[5]・四次調査）

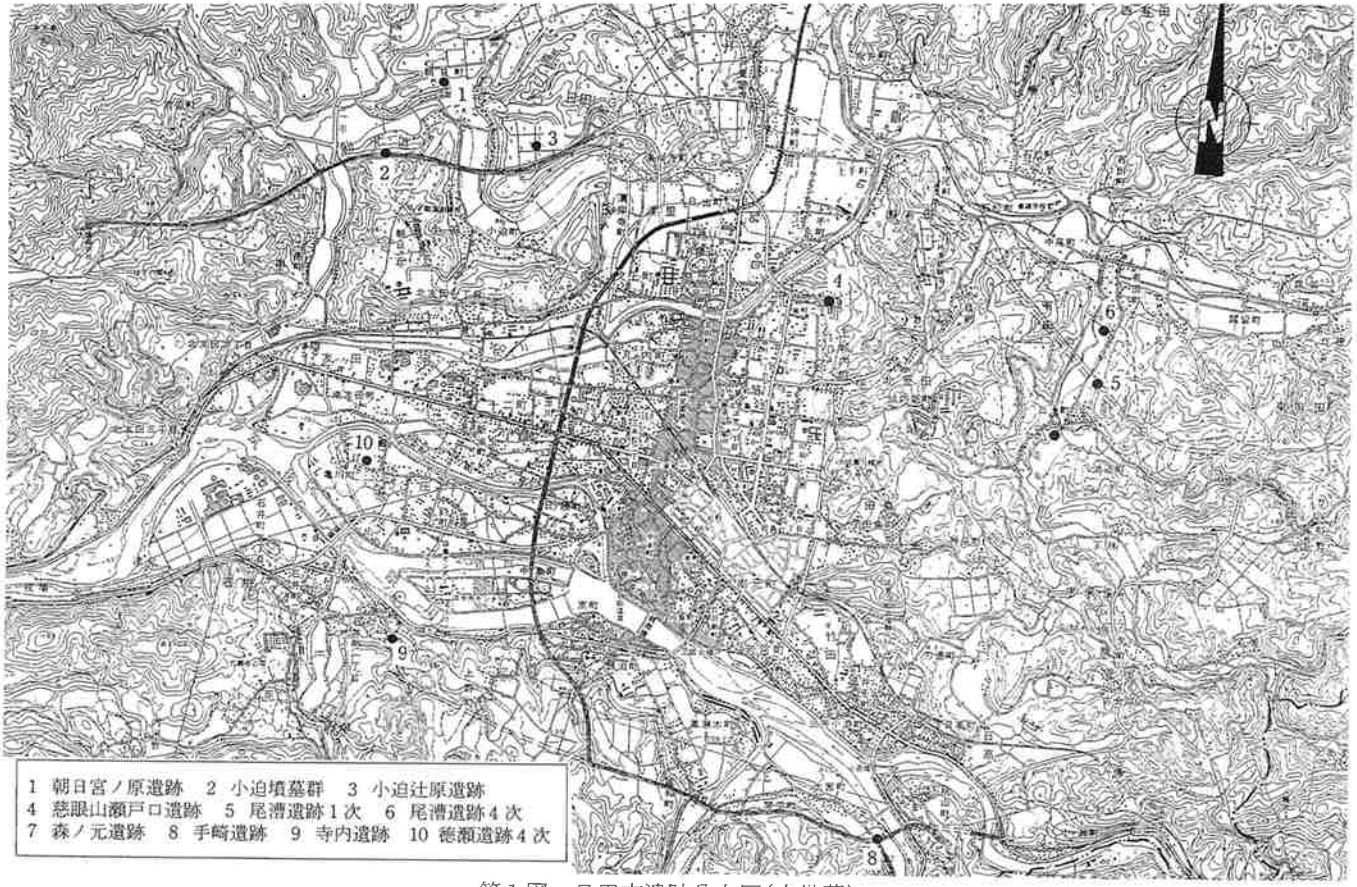
当遺跡は盆地東部の求来里川で形成された沖積地から左岸段丘上および丘陵頂上部までを含んだ地域に位置している。これまで4度の調査が行われており小稿では中世の遺構を検出した1次および4次調査の概要について紹介することにする。

平成4年度に行われた1次調査では古墳時代後期の竪穴住居跡のほか中世墓、近世の掘立柱建物跡および円墳1基などが確認されている。ここでは中世墓3基のうち時期の明確な2基について紹介する。

1号墓は長軸を東西方向にとり、頭位は東方向である。平面プランは隅丸長方形を呈すると考えられるが西側が削平を受けている。埋葬施設については木質等の検出には至らなかった。副葬品では坑内東側で同安窯系青磁碗、白磁碗、短刀などが出土している。

2号墓は長軸を南北方向にとり、頭位は副葬品の出土状況から担当者は北方向と報告している。平面プランは隅丸長方形を呈している。注目されるのは土坑の床全面に炭敷きが施されていたことである。炭層を取り除いた結果、壁面および床面に被熱はみられず焼土も検出されていないことから、火葬の可能性はないと考えられる。炭は柔らかく藁あるいは笹ではないかと報告されている。炭層から土師器の杯4点、小皿、六道銭が出土しているほか炭層上面からは鉄鍋が倒置された状態で検出された。3点の杯および小皿は、内面にススが付着していたことから灯明皿として使用していたと考えられる。鉄鍋は土坑の中央、被葬者の腹部の辺りに埋置されていた。六道銭は中央付近で大きく2ヶ所に分かれ緡の状態で出土した。周辺に散乱していたバラ銭と緡のひとつを剝ぎ取った結果、判読可能のものから新旧の時期をそれぞれ示す資料は開元通寶（唐六二一年）と朝鮮通寶（李氏朝鮮一四二三年）の銭貨であった。また、共伴した土師器の杯を慈眼山遺跡の出土資料と比較検討した結果、2号墓の埋葬時期は15世紀中葉以降、16世紀前半代に収まるものである。

平成9年度の調査では中世墓が2基確認されている。1号は土坑墓で長軸を南北方向にとり、平面プランは長方形を呈している。埋葬時期は出土した瓦質土器から15～16世紀代に属すると考えられている。2号墓は長軸を南北方向にとり、平面プラ



第1図　日田市遺跡分布図(中世墓)

ンは隅丸長方形を呈している。棺材の痕跡が確認されたことから木棺墓と思われる。

※尾漕遺跡(平成4年度調査分)の本報告では県下で検出された中世墓が集成されており一覧できる。(註1)

〃森ノ元遺跡〃(6)

当遺跡は盆地東部の求来里川で形成された谷状沖積地に位置している。先述の尾漕遺跡とは近接した位置にあり、周辺には長迫遺跡(A～D地点)などが知られている。中世の遺構として掘立柱建物跡が15棟と調査区中央において土坑墓が1基検出された。土坑墓は長軸を東西方向にとり、平面プランは隅丸方形を呈している。埋葬施設は釘、木質など発見されていないので不明である。副葬品は土坑内北側に小刀が1点、南側に東から青磁皿と青磁碗が並んで出土した。輸入陶磁器については、いずれも龍泉窯系のもので青磁Ⅰ類に属し12世紀後半代が与えられる。また、土坑墓は12・13号建物と重複しており、柱穴から同類の青磁碗が出土していることからこれらが同時に存在していたと仮定すると御堂的施設の可能性が考えられている。他の掘立柱建物跡についても出土した青磁器、瓦器椀、土師式土器などから同様の時期が考えられている。

〃手崎遺跡〃(7)

当遺跡は盆地南部の大山川の河岸段丘上に位置している。旧石器～中世にかけての複合遺跡で、主に古墳時代から奈良時代の竪穴住居跡が遺跡の中心を占めている。そのなかで中世墓は2基が発見されている。1号中世墓は遺跡中央のC地区で確認された。長軸は東西方向で、平面プランは不整形である。上部構造は凝灰岩の大型角礫で覆われており、下部の浅い掘り込みの底部にはわずかながら焼土が確認された。副葬品はなかったが2号墓と構造が一致することから同時期の墓と考えられる。2号中世墓は西側のD地区で検出された。平面プランは不整形で、1号墓と同様に安山岩の大型角礫で覆われていた。出土した青磁碗の位置から頭位は北東方向と推測されるほか、骨の遺存状況から屈葬であったと考えられている。副葬品は、龍泉窯

系青磁碗、白磁、土師器小皿などで埋葬時期は13世紀後半頃とみられる。

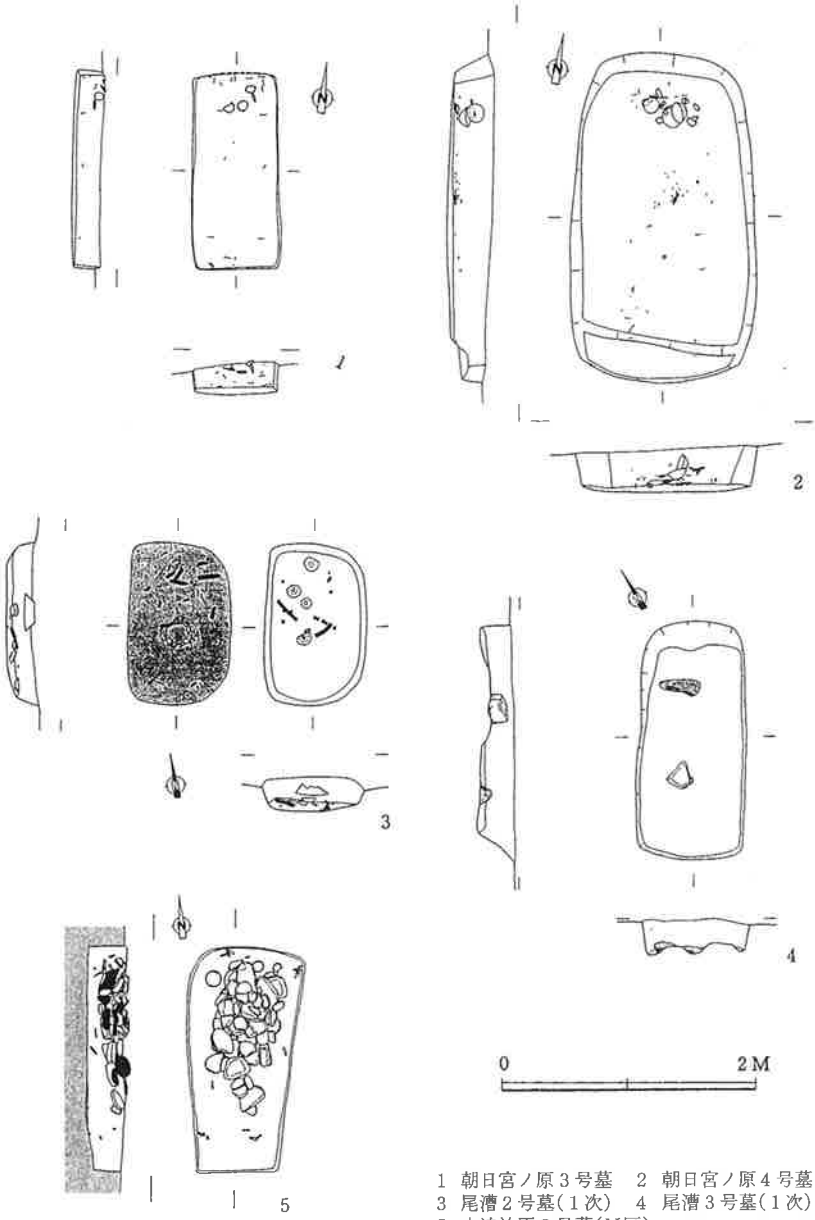
〃寺内遺跡〃

当遺跡は盆地南部の三隈川南岸で支流の石井川により形成された谷状沖積地から低位段丘面にかけて位置している。周辺には前方後円墳を含む護願寺古墳群や穴観音古墳(装飾古墳)、また縄文時代～近世にかけての複合遺跡である長者原遺跡が知られており、古くから一群を形成してきた地域である。調査では弥生時代～近世にかけての遺構・遺物の発見があったが、調査区中央において中世墓が一基確認されている。土坑墓は長軸を南北方向にとり平面プランは長方形を呈している。南側で龍泉窯系青磁碗が出土した。埋葬時期は13世紀代とみられる。

〃徳瀬遺跡〃

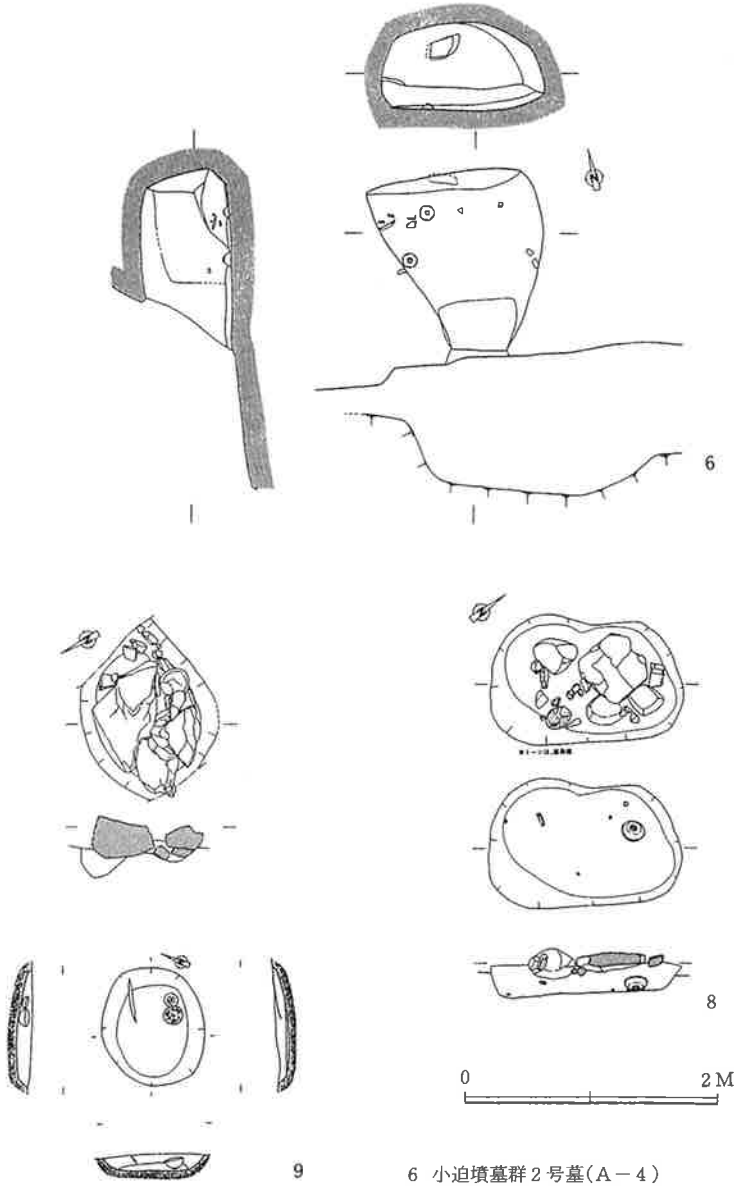
当遺跡は盆地西部の三隈川と庄手川に挟まれた中洲の微高地上に位置する。市道や県営住宅建設などに伴い計4度の調査が行われ、弥生時代の集落や古墳時代の方形周溝墓をはじめとする墓地などが調査されている。平成9年度の調査では調査区中央で土坑墓が1基確認された。土坑墓は長軸を南北方向にとり、平面プランは長方形を呈している。北側で龍泉窯系青磁碗が出土した。青磁碗は外面の摩耗した状況より被葬者が長年愛用していたものと思われる。形式は大宰府編年のI－5類に属するもので、13世紀後半代におくことができる。[8] また、墓の北側で東西方向に走る中世の溝が検出されており屋敷墓の可能性を考えることができる。

以上、最新の調査成果から中世墓を中心に紹介してきた。日田市の中世墓を概観して気づくことは、北部や東部に集中しており南部では少なく西部に至っては全く発見されていないのが現状である。このことは調査機会の偏りが上げられるが、その



1 朝日宮ノ原３号墓　2 朝日宮ノ原４号墓
3 尾漕２号墓（１次）　4 尾漕３号墓（１次）
5 小迫辻原３号墓（N区）

第２図　日田の中世墓(1)



6 小迫墳墓群２号墓(Ａ－４)
7 手崎２号墓　8 手崎３号墓
9 森ノ元２号中世墓

第３図　日田の中世墓(2)

点を考慮しても朝日宮ノ原遺跡4号墓や尾漕遺跡2号墓などは当該期における日田を代表する墓葬の例として捉えることができる。現在のところ、中世墓が発見されていない盆地西部でも大規模な農業基盤整備事業が予定されており、今後調査が行われることで状況は変化していくものと思われる。これらの地区は古代の大肥条里の推定地にあたることから、今後の調査成果に注目していきたい。また、墓を造営するうえでの選地については台地上、沖積地、微高地と様々でひとつのまとまりを見ることはできない。

ところで、これまでに発見された中世墓について時期の特定できるものから3時期に大別することが可能である。I期は朝日宮ノ原4号墓、小迫辻原N区2～4号墓、森ノ元2号中世墓などが該当し、埋葬時期として12世紀後半～13世紀前半が与えられる。II期は小迫辻原K区、小迫墳墓群2号墓、寺内1号墓、徳瀬1号墓が該当する。埋葬時期は13世紀後半から一部14世紀代に入る可能性がある。小迫墳墓群2号墓は古墳時代の横穴墓を再利用していたが、このような例は県内では船塚横穴墓群[9]に類例を求めることができる。III期は尾漕遺跡(1次・4次)が該当し、埋葬時期は14世紀後半～16世紀代が考えられている。

三　小結

3期を概観して、集団墓の造営や継続的に墓地利用されていた遺跡は現在のところ発見されていないため、中世墓の造営が盆地内でどのように展開していったのかを知ることは難しい状況にある。

中世前期(I・II期)に属する墓は市内各地で発見されているが、ほとんどが土坑墓(一部礫を伴う墓もある)で屋敷墓的な性格を持っていると考えられ、建物群や施設に伴うかたちで検出されている。副葬品については、特に輸入陶磁器を埋葬する例が大勢を占めているが、徐々に希薄になっていく傾向にある。なかでも、朝日宮ノ原4号墓は豊富な副葬品と墓床面に木炭を敷いていた点など特徴的である。被葬者は、湖州鏡・和鋏・紅皿などが副葬されていたことから女性であると考えられている。また、木炭敷きについては他の例とともに後述することにする。このほか、森ノ元2号中世墓は青磁碗・青磁皿・短刀が共伴

しており、刀を有している点から被葬者は男性で、ある程度の階層にあったことが想定されている。

中世後期(Ⅲ期)では尾漕遺跡のみが知られているが、2号墓のように多量の六道銭を副葬するなど特異な例と言える。この時期、県下においては各地で集団墓が造営され始める。県北では笠松遺跡[10]などで火葬土坑墓が出現しているほか、千人塚遺跡[11]、杉園遺跡などでは土坑墓からなる集団墓が検出されている。また、15世紀中葉以降には県内で極地的な広がりを見せる『地下式壙』が存在するが、これまで限られた階層性の墓制として捉えられている。[12][13]地下式壙は中津市・三光村、国東半島東端、臼杵市・大野川流域に集中しており、県西部・県南部では発見されていない。しかしながら、筆者が平成9年度に調査した口が原遺跡5号土坑については地下式壙の可能性を考えている。[14]ただし、これまで日田市での発見がないことや遺存状況がよくなかったことから慎重に取り扱うとともに、今後再検討する必要があると感じている。

ここで尾漕遺跡2号墓について少し触れてみることにする。2号墓は墓床全面に炭敷きが施されていたことや出土した六道銭の数量で注目されているが、前者については、市内の朝日宮ノ原4号墓に次ぐ2例目にあたり県内では佐知遺跡17号遺構[15]、表B遺跡[16]の楕円形土坑が知られている。また、尾漕3号墓も一部炭敷きを施していることから計5基が確認されていることになる。しかしながら、朝日宮ノ原4号墓と佐知17号遺構は13世紀代、表B遺跡は14世紀代、尾漕遺跡は15世紀代と考えられており大きな時期差が生じている。このような埋葬方法が県内で普遍的にみられた現象といえるのか現段階では言及することは難しく、県境に接する地域での発見を考え今後周辺地域との検討を要する課題である。また六道銭については、本報告で櫻木晋一氏による詳しい考察がなされているのでここでは簡略に紹介したい。[17]九州における六道銭出土墓は約九十遺跡一〇〇〇基以上が報告されているが、これらは主に近世墓によるもので中世墓における出土例は極めて少ないようである。また、県内に限っては当遺跡を含めて4例を数えるのみで本例の出土した埋納量については日本最多枚数という貴重な資料となっている。東日本、特に関東近辺の六道銭を出土した中世墓の発見例と比べて九州での検出が少ないことに関して、氏は次のような理由を挙げている。一つに中世における九州での流通銭貨量の不足と、もうひとつには六道銭を副葬する習俗が中世期において定

着しなかった点を指摘している。後者については六道銭を副葬する習俗の開始時期が特定できていないことが今後の課題であるとも述べている。尾漕2号墓の内容からは、日田市東部の有田地区が有力氏族の拠点的な地域であった可能性を示している。

以上、近年の調査例から日田の中世墓をみてきたが、注目すべき発見がありながらもまだまだ資料不足の感は否めない。中世墓には、様々な埋葬方法や構造の違いを見ることができ、このことは地域差や階層差など種々の要素を含んだうえに形成されていったものと思われる。これらは周辺地域の様相などを踏まえ今後再検討することが必要である。現在のところ、市内で発見されている中世墓だけでは中世日田を理解していくことは難しいが、他の遺構を含めて新発見の機会を待ちたい。また平安末期から中世への転換期の実相もよくわかっていなかったが、昨年調査した森ノ元遺跡や日田条里・上手地区の調査で12～13世紀にかけての掘立柱建物跡が検出されており、これらの資料が見いだせたことは今後の研究の好材料となろう。

註1　馬形遺跡の2基の土坑墓は本報告において9世紀後半の時期に属すると訂正されている。

(1)土居和幸・友岡信彦　「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世土壙墓」『おおいた考古』第2集　一九八九
(2)土居和幸　『小迫辻原遺跡発掘調査概報』　日田市教育委員会　一九九〇
(3)渋谷忠章・小柳和宏ほか　「小迫墳墓群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)　大分県教育委員会　一九九五
(4)友岡信彦・土居和幸・行時志郎「日田・玖珠地域の中世墓」　大分県地方史第一三七号　一九九〇
(5)友岡信彦　「佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ケ原古墳群」
『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)　大分県教育委員会　一九九八
(6)行時志郎　「森ノ元遺跡」　『日田市埋蔵文化財調査報告書』第14集　日田市教育委員会　一九九八

(7)田中裕介　『日田市高瀬遺跡群の調査2　手崎遺跡・大部遺跡』　大分県教育委員会　一九九八
(8)横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』　一九七八
(9)渋谷忠章・佐藤良二郎　「中世墳墓の地域的様相ー九州」『考古学ジャーナル三〇四』　一九八九
(10)小林昭彦　『一般国道10号　宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』　大分県教育委員会　一九九一
(11)坂本嘉弘・高野弘之「千人塚遺跡」『緒方地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』　緒方町教育委員会　一九九〇
(12)(9)に同じ
(13)原田昭一「大分県における中世後半期の墓制変革」『考古学と信仰』　同志社大学考古学シリーズⅣ
(14)吉田博嗣　「口が原遺跡」　『日田市埋蔵文化財調査報告書』第17集　日田市教育委員会　一九九八
(15)坂本嘉弘　「佐知遺跡」　『大分県文化財調査報告書』第81輯　大分県教育委員会　一九八九
(16)綿貫俊一　『犬飼地区遺跡群発掘調査概報』　犬飼町教育委員会　一九九〇
(17)櫻木晋一　「尾漕遺跡2号墓と九州における中世墓出土の六道銭」『(5)に同じ』

(日田市教育委員会)